

【書評】

田口紘子著『現代アメリカ初等歴史学習論研究－客観主義から構築主義への変革－』

(風間書房, 2011年) 6,500円

梅津正美

(鳴門教育大学)

本書は、田口紘子氏が2009年に広島大学に提出された学位論文を公刊されたものである。田口氏の研究目的は、初等学校における歴史教育改革という視点から、構築主義歴史学習論を抽出し、その意義と特質を明らかにすることである。

氏が用いる主な研究方法は、知識は認識主体の視点や問題意識にもとづいて作り出されていくものとする構築主義の知識論と、子どもが議論を通して社会の意味や社会づくりの規準をつくり出していくことを社会科学学習ととらえる社会形成科の理論を枠組みにして、1980年代以降のアメリカ初等歴史教育実践を選択・分析し、構築主義の歴史学習原理を解明することである。

本書は、以下の章から構成されている。

- 序章 研究の目的と方法
- 第一章 初等歴史教育の課題と改革への視座
- 第二章 歴史的関係構築型歴史学習－Tina Reynoldsの実践「個人の歴史」・「家族の歴史」の場合－
- 第三章 歴史的意味構築型歴史学習－Karen JorgensenとJames Venableの実践「オローニ・ワークショップ」の場合－
- 第四章 社会的関係構築型歴史学習－LeeAnn Fitzpatrickの実践「コロンブス」の場合－
- 第五章 社会的意味構築型歴史学習－Sara Atkinsonの実践「アメリカ独立戦争」の場合－
- 第六章 現代アメリカにおける歴史教育改革と構築主義歴史学習
- 終章 総括と考察

結論は、次のように導かれる。①学習の目的と方法から、初等学校における構築主義歴史学習論は、四類型でつかむことができる。すなわち、歴史における社会研究を目的にし、子どもが自己の視点から過去社会を多様に構成する「歴史的関係構築型」(類型1)、歴史における社会研究を目的にし、子どもが現代社会との差異から過去社会の

特徴を意味づけていく「歴史的意味構築型」(類型2)、歴史による社会構築を目的にし、子どもが歴史に対する社会的判断を構成していく「社会的関係構築型」(類型3)、歴史による社会構築を目的にし、子どもが歴史に対する多様な社会的判断の差異から社会の意味をつくり出していく「社会的意味構築型」(類型4)の四類型である。②構築主義歴史学習は、目的においては歴史における社会研究から歴史による社会構築へ、方法においては関係構築から意味構築へと深化・発展していくことにより、歴史学習は「歴史による社会科学学習」として成り立ち、その意義を明確にできる。

評者が見つめた本書の最大の意義は、構築主義の知識論を基盤に、実際の歴史教育実践の分析を通して子どもの歴史の学習構造を解明しようとする新たな歴史教育研究方法論の開拓に果敢に挑戦したことである。教育内容や教材の論理の説明から、子どもの学びの構成の読解への方法論的転回を主張しているものと受けとめた。

評者が本書の意義を「方法論開拓への挑戦」と述べるのは、筆者が本書を契機にその方法論をさらに精緻化されることを期待するからである。①日本の初等歴史教育実践の成果と課題に対する十分な考察をふまえて、今なぜ構築主義による改革が要請されるのかについてさらに説得的に説明すること、②実践に即して子どもの学習構造を解明する帰納的で質的な研究の方法と、社会形成科の理論を下敷きに演繹的に類型と各類型の意義を指定して実践の分析を進める方法との整合性及び妥当性を検討すべきこと、③分析対象となる実践記録を、二次資料(理論書)から引くことの妥当性を吟味すること、④類型3の学習論が幼稚園児・1年生の実践から、類型4が5年生の実践から導かれているように、理論及びその発展と学習主体の学年次との関係が考察の外に置かれているので、カリキュラム編成との関わりで、このことを検討し直すことが必要であると思われた。